

中学生におけるソーシャルサポートと孤独感、抑うつ感との関係について

A96-4455 水本 恵 (指導教官 朝倉隆司)

1、目的

本研究の目的は対人的環境と中学生のソーシャルサポートと孤独感、抑うつ感との関係を明らかにすることである。

2、研究方法

埼玉県、鳥取県の中学2、3年生の生徒342名(男子175名、女子168名)を対象質に問紙調査を無記名で行った。回収率は85.5%であった。調査期間は11月下旬から12月上旬である。調査内容は、基本的属性、対人的環境(家族、友人関係)、ソーシャルサポート、孤独感(LSO)、抑うつ尺度(CDI)である。SPSSを用いて集計し、相関係数、 χ^2 検定、分散分析によって各項目の関連を検討した。

3、結果と考察

孤独感尺度得点、ソーシャルサポート尺度得点では、性差が認められ男子のほうが孤独感得点が高く(男子49.6点、女子45.6点)、ソーシャルサポート尺度得点は低かった(男子113点、女子149点)、CDI得点では性差は見られなかった(男子182点、女子179点)。男女共にソーシャルサポート、孤独感、抑うつ感の間で有意な相関がみられ、ソーシャルサポートが高いと、孤独感、抑うつ感が高いという傾向がみられた。

友人関係との関係にがついてみると、「親しい友人の人数」が男子では「1~3人」、女子では「4~6人」までは人数が増えるほどソーシャルサポートは高く、孤独感、抑うつ感が低くなるという傾向が見られたがそれ以上は人数が増えても得点はほとんど変化しなかった。また、「異性の友人」「一緒に下校する友人」でも同様に「いない」者のほうがソーシャルサポートは低く、孤独感、抑うつ感が高い傾向にあった。

「相談できる教師」では男子のソーシャルサポートのみ

「いる」者のほうで高くなった。「教師以外の相談できる人」では男女ともソーシャルサポート、孤独感、抑うつ感においているものといないもの間でさが見られた。生徒と教師は孤独感や抑うつ感を解消できるほど関わりあっていないと考えられる。

家族との関係においては、「両親の有無」において男子のみ孤独感が「いない」、「どちらかかいない」と答えた者が高くなっていた。女子では「母親の有無」で「いない」と答えたもののほうが抑うつ感が高かった。

学校生活では「部活」において男子では参加している者のほうがソーシャルサポートが高かった。「保健室(1ヶ月の利用回数)」については利用者が少ないためあまり差がみられなかったが、女子で3日以上利用しているものは抑うつ感が高かった。「いじめられ経験」では経験のある者が男子では孤独感、女子では孤独感尺度、抑うつ感が高くなっていた。「趣味の有無」では「ない」者で男子ではソーシャルサポートが低く、孤独感が高くなり、女子においては、ソーシャルサポートが低くなり、孤独感、抑うつ感が高かった。

4、結論

中学生は友人が少ない、少ないこと、両親が両方揃ってないこと、いじめられた経験があることで孤独感が高く、抑うつ感が高い友人が少ない、少ないと高くなっている。女子では抑うつ感や欠席回数や保健室を利用する回数が多い者が高く、表面に出やすいと考える。ソーシャルサポートが十分な場合、孤独感、抑うつ感や低くなることより、中学生はかぞくや学校ではなく友人からソーシャルサポートをもっと多く受けている。家族や学校からのソーシャルサポートがもっと必要ではないかと思う。